

是為論 ~是を論と為す~②

『太極拳譜』の発見 (その2)

古典研究会研究発表第2回は、『太極拳譜』の中から『十三勢 (一名長拳、亦名十三勢)』をご紹介します。

1852年に発見された『太極拳譜』の原本は残っておらず、その後の太極拳理論の研究資料となっているのは、武禹襄と彼の研究と拳術を引き継いだ李亦畬が書き残したものがほとんどです。この『十三勢』も『太極拳経』と同じく王宗岳の作と考えられており、もともとは題名もなかったようです。

この文献は『太極拳積名』という題名で紹介されることが多いようですが、それは李亦畬が原文に加筆をしたものであることがわかっています。

以下に原文と合わせ加筆部分に下線を示します。

【読み下し文】

太極拳、一名長拳、またの名を十三勢。

長拳は、長江大海の如く滔滔として絶えざるなり。十三勢は、掬、捋、擠、按、採、捩、肘、靠、進、退、顧、盼、定なり。掬、捋、擠、按は即ち坎、離、震、兌、四正方なり。採、捩、肘、靠は即ち乾、坤、艮、巽、四斜角なり。これ八卦なり。進歩、退歩、左顧、右盼、中定、は即ち金、木、水、火、土なり。これ五行なり。合わせてこれを十三勢という。

これ技なり、一着一勢、ことごとく陰陽を外れず、ゆえにまたの名を太極拳という。

まず、下線部を除く原文を見てみましょう。

長拳は滔滔と絶えざるなり、とあり、「長拳」と呼ばれる拳術が存在していたことがうかがえます。

続いて「十三勢」の内容が示されますが、具体的に何を指しているのかは説明されていません。示されているのはそれらが八卦と五行に対応しているということだけです。

八卦とは、陰陽の組み合わせで天地自然の法則を読み解くもので、陰陽が分かれる前を太極、陰と陽

だけの組み合わせを両儀、陰陽二組の組み合わせを四象、陰陽三組を八卦と呼びます。

五行もまた自然哲学の思想で、物事を木火土金水の五要素によって要約象徴するものです。

楊露禪が若いころに陳家溝で学んだ拳術は、「十三勢」と呼ばれていました。しかし『太極拳譜』は陳家溝とは出自が別であり、この原文の中での「十三勢」は、拳術の名称ではないようです。

原文の13の項目は現在、太極拳の8種の手法と5種の歩法、「八門五歩」として使われています。

例えば「攬雀尾」は、掬、捋、擠、按の手法(楊名時太極拳では捋と擠の間に「抹掌」が入ります)で構成されています。

武禹襄と李亦畬は、おそらく文献の研究と実践を通して、この原文『十三勢』に書かれた13の項目を基本の技の構成要素として理解し、そしてそれらがすべて『太極拳経』に示された陰陽の原理と符合する、と考えたのではないのでしょうか。

1880年に李亦畬は、この文献の冒頭と結びに「太極拳」という名称を追記します。これが現在のところ、「太極拳」という名称が史的に確認される最初の文献であるようです。武禹襄作の文献には「太極拳」は現れませんが、口頭ではすでに使われていたであろうと考えられています。

李亦畬は加筆部分で、それまで「長拳」または「十三勢」と呼ばれていた拳術は、その技のひとつひとつがどの一瞬も太極陰陽の原理を外れない、だから「太極拳」とも呼べるのだ、と説明しているのです。

* * *

次回は、『十三勢歌』(別名『十三勢行功歌』)をお届けします。



中国河北省「武禹襄故居」内の壁面に彫られた十三勢
撮影・楊進